

平成26年 8月10日

視 察 報 告 書

八街市議会議長 林 修三 様

会派の名称 やちまた21
代表者名 加藤 弘

政務活動費による行政視察を行いましたので、下記のとおり報告いたします。

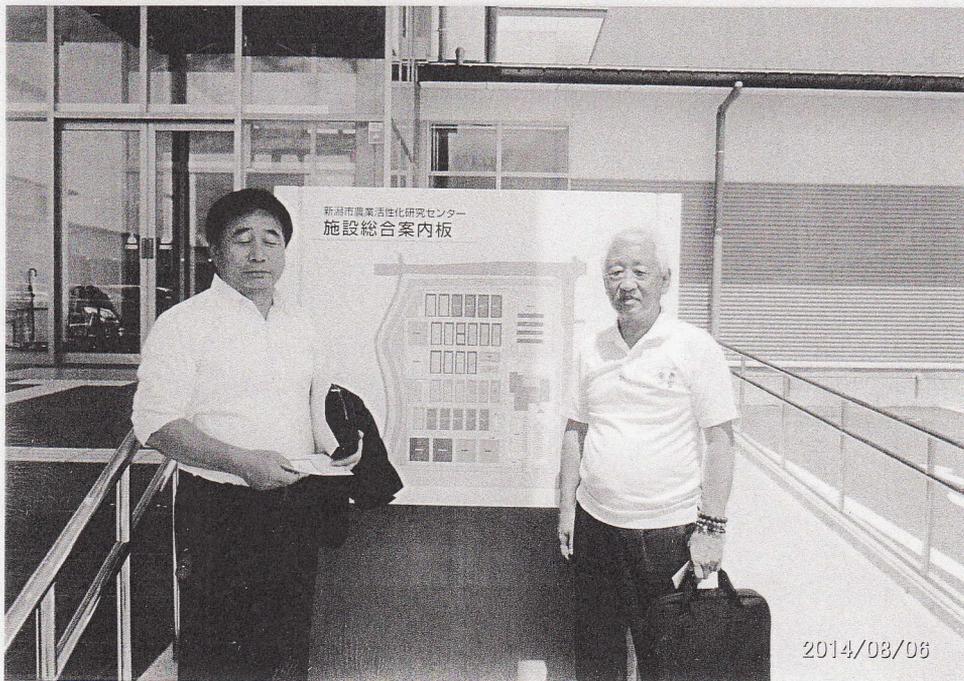
記

1. 日 程 平成26年 8月 4日 (月) ~ 8月6日 (水)

2. 視察地及び視察項目

日 程	視 察 地	視 察 項 目
・ 8 ・ 4	新潟県新発田市	薬用作物の研究
・ 8 ・ 5	新潟県 胎内市	薬用作物の研究
・ 8 ・ 6	新潟県 新潟市	薬用作物の研究

3. 参加者 加藤 弘 林 政男



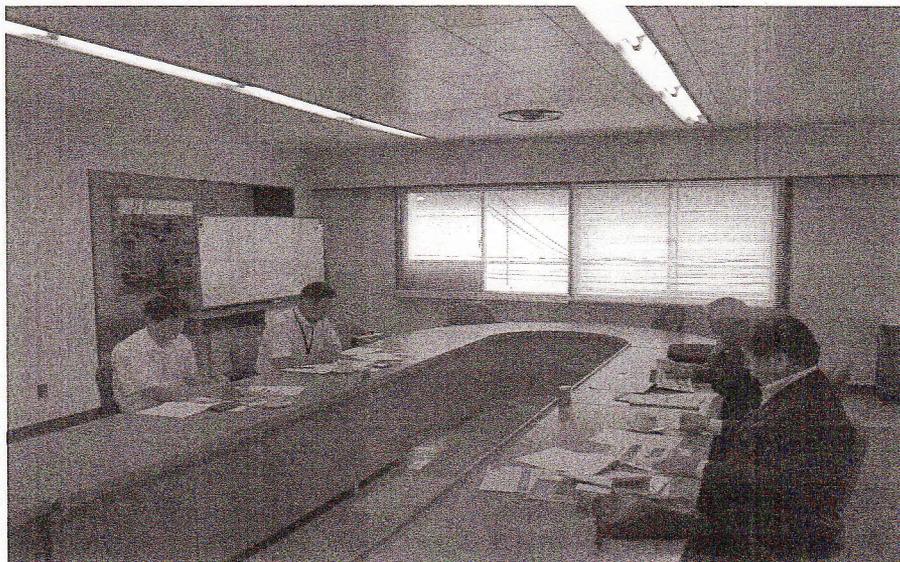
4. 視察経過

今回の視察の目的は、八街市に於ける農業生産者の高齢化・担い手不足、遊休農地、耕作放棄地拡大の懸念、労務が過重でない新たな品目の導入の必要性を模索するために

8月4日 午後2時 新潟県新発田市【人口 約10万1千人、面積、約532km²】を訪れた。議会事務局 副参事の吉田 雅則氏の出迎えを受け、会議室で川瀬 孝男農水振興課長、渡辺 貴守係長から懇切丁寧な説明を受けました。

新発田市では、県下有数の園芸地帯として葉タバコ、チューリップ球根生産が盛んでしたが、葉タバコ、球根チューリップの生産からもっと軽量で運搬容易なもので猿害を防げる作物として、薬用作物を取り上げ、研究を開始した。他の産地が、メーカーと協議を進める中、新発田市は、(社)東京生薬協会と協議し試験栽培を行うことになった。まだ端緒に就いたばかりとのことでした。

研修の様子、



この後現地視察をしました。写真は、芍薬の栽培試験圃場



8月5日は、胎内市【人口、約30000人、面積、約265km²】に伺った。胎内市の農林水産部農産振興係 田部 雅之参事、阿彦 和男課長、農林水産課 農業振興係 長谷川 正人主任に説明を受けました。

胎内市では、実験の段階から実証に入った感がありました。植物をカンゾウに絞り、カンゾウの苗もバイオテクノロジーを利用し、プラグ苗を生産し、圃場に作付していました。また、全国のカンゾウを生産する団体と連携し、カンゾウ生産の効率性を高める努力をされていました。

視察では、ここまで見せて大丈夫かと心配になるくらい案内して頂きました。生産目標としては、2年生産して80万円を目指すそうです。

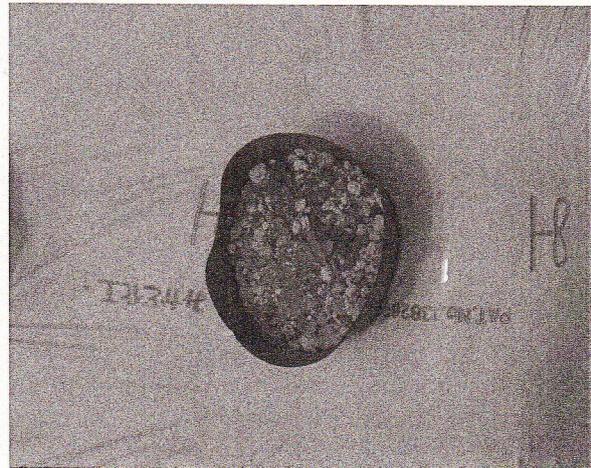
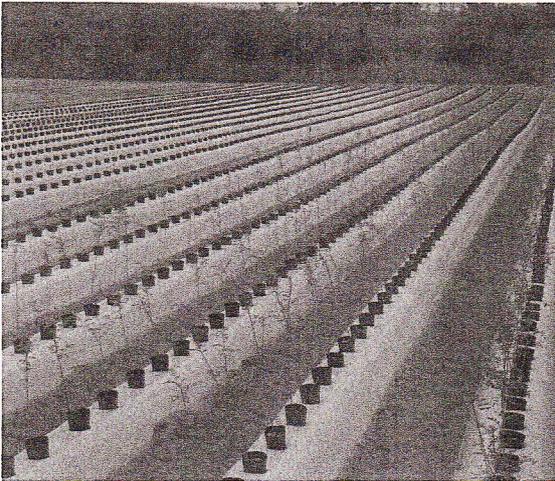
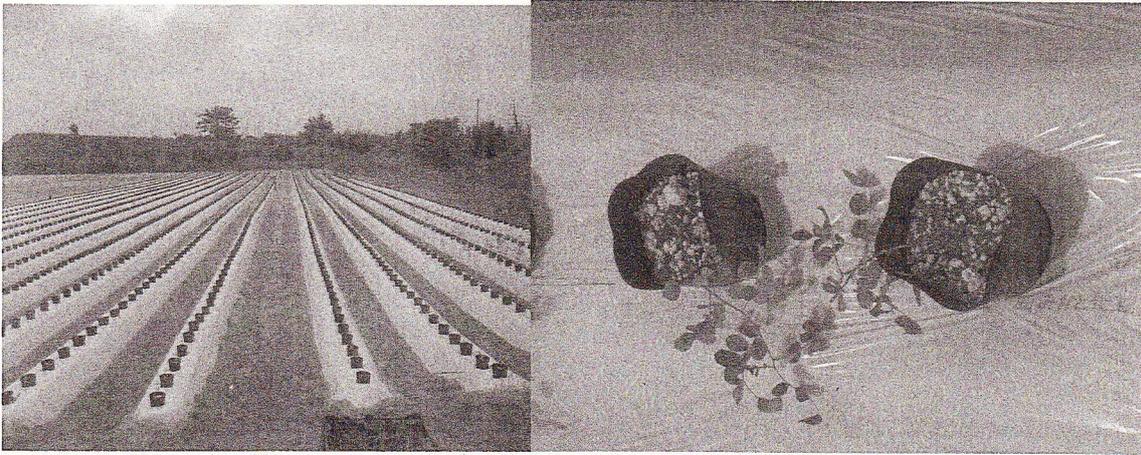
カンゾウは、スペインカンゾウとウラルカンゾウがあり、ウラルカンゾウの方が、高価格で取引されることから、ウラルカンゾウの生産に力を入れるとのことでした。

ウラルカンゾウの生産現場

1年目の取り組み状態 雑草との戦い（無農薬のため）生育の良いものは、スペインカンゾウとのこと。ウラルカンゾウのほうが難しい。



2年目の状態、バイオテクノロジーにより均一な苗が生産出来たため、圃場での生育も均一、畝の間は、マルチで覆う予定とか。



上の写真は、ウラルカンゾウのポット植え付け状態。初期生育段階で、雑草が生えたと、後の生育に大きく影響する。

8月6日 新潟市【人口 約81万人、面積 約726 km²】では、午前10時新潟市農業活性化センターをお邪魔した。

センターでは、小俣 俊明所長補佐、中村 晴彦係長より御教示を受けました。新潟市議会事務局調査課 餅田 七重主査も同席されました。

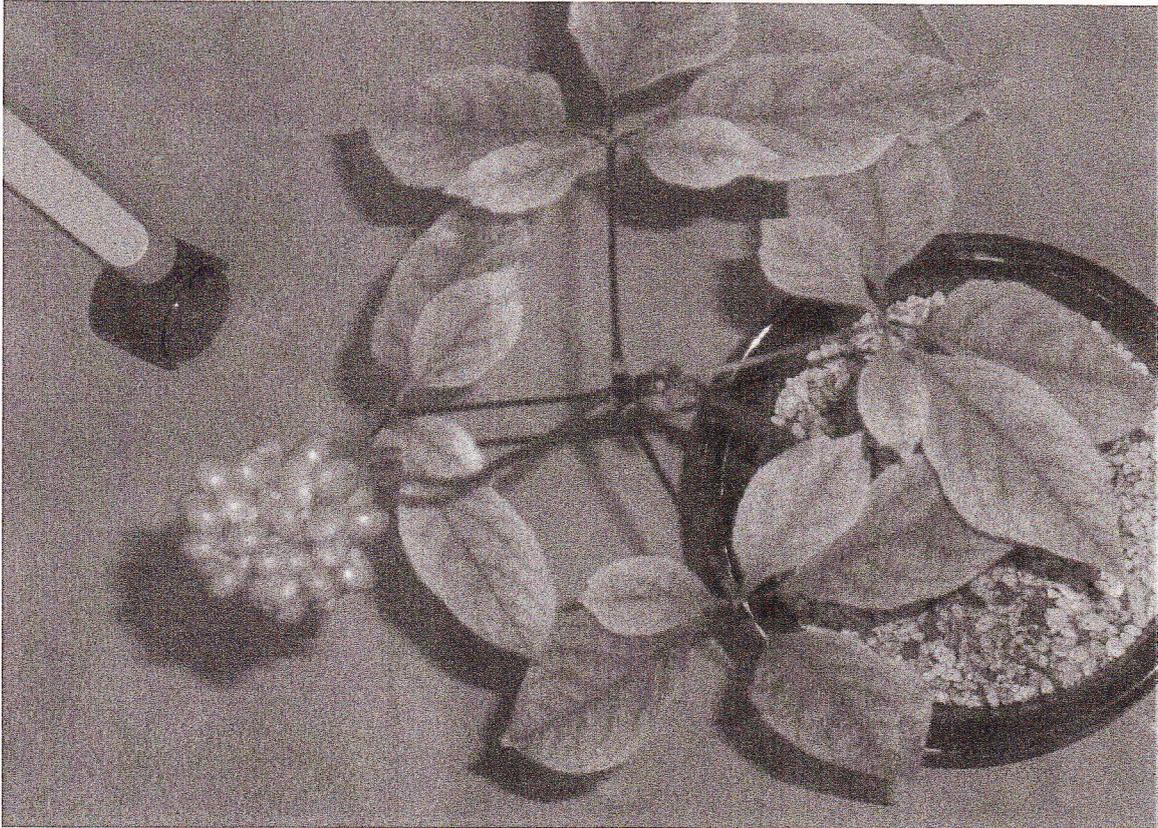
研究センターは、市長の指示もあり意気軒昂でした。ミシマサイコ、ハトムギ、エビスグサ、トウキ、ハンゲ、ウラルカンゾウ、ニホンハッカ、マオウ、シャクヤク、ケイリンサイシン、などの種苗を公益社団法人 東京生薬協会から提供を受け、研究が開始されました。更に、新潟薬科大学等との産学連携を図り、薬用作物の拠点化に取り組むとのことでした。

特にオタネニンジン（高麗人参）の生産には、特に力を入れるそうです。播種か

ら生産までを目指して研究が進められていました。非常に興味深く観察しました。韓国等では、ニンジン栽培は、その栽培方法については、栽培農家の秘中の秘とされ、研究文献などは散見されない場合が多いそうです。

そこで新潟市では、独自に栽培方法を見出す研究を主なテーマとして取り組むことしました。

この栽培方法が確立されれば、大きな収益源になるのは間違いありません。オタネニンジンの種（赤い実）薬効は、根茎よりあるそうです。



八街市も、遊休農地、耕作放棄地、高齢化により農業の衰退が進み、何とかしなければいけない。その先駆けと議員もならなくては。